

## あとがき

「四条宮下野集」は、私が大学につとめてはじめてゼミというものを受け持った時、まっ先にとりあげた作品だった。実はその前に一度、何かの仕事の関係で仲間が集まった時、佐伯梅友先生を中心に読みかけたことがあったのだが、仕事の進展とともにその集まりがなくなってしまったので、ごくはじめの部分しか読まないで、そのまま中絶、というようなことになってしまったことがあった。だから「四条宮下野集」を、ていねいに、まともにしたのはそのゼミでの演習が最初であった。その時はわけのわからないところが多くて、後にこういう形で出版することになるだろうとは、少くともその時点では、全く思いもかけないことであった。

ところで私のつとめる都留文科大学に、中世文学研究会という、非常に熱心な学生の研究サークルがある。私はその顧問のひとりということになっているが、そのサークルのメンバーは、毎年夏休みになると二、三泊の合宿をやっていて、どこか涼しいところに出かけては楽しいひとときをもつのである。それは日常の学習活動と違って、従来は非常に懇親会的な性格のつよいものであった。しかしせっかくなささんの人数が集まるのだから、何か意義のあることをやりたい、という声次第に出はじめて、何でもいいから、とにかく皆でまとまってやれる仕事はないか、ということになった。私の「四条宮下野集」ノートもそのころにはだんだん整備されてきていて、まだまだわからないところはあるにしろ、一応の本文はできていたから、その本文をもとにして、それでは索引づくりでもやってみるか、ということになったのが、そもそもこの計画の出発点だったのである。しかし合宿が終わった時には、人海戦術でとりまくったカードの山が、未整理のまま、私の手許に残るという結果になっ

た。考えてみれば、当然そうなるはずだったのだが、自分の責任のもとで索引づくりをした経験のない私にとって、それは、うかつにも予想外のことであった。しかもそれからの方が実は大変だったのだ。カードの確認、整理、統一、配列、原稿化、逆引き、それに和歌索引、登場人物索引等の仕事で、私は、残りの夏休みのほとんど全部を費してしまふ、ということになった。

出版のあてはじめからあったわけではない。たまたま宮内庁書陵部の橋本不美男氏にこのことをお話ししたところ、氏が、非常に熱心に、まるでわがごとくのように、活字にするためにお骨折りくださったのである。「四条宮下野集」の研究ということについても氏は大先輩である。私はその学恩を多大にこうむっているが、実は、日常の研究活動でも、どれほどお世話になっているかわからないのである。氏は、今度も、影印版を添えるようにおすすめてくださったり、序文を書くことをころよく引き受けてくださった。ありがたいことであつた。

文学研究の第一歩は、素朴ではあるが、やはり作品そのものをよく読むことに尽きる、と私は思っている。そういうことを、恩師である山岸徳平、岩井良雄、佐伯梅友、あるいは小西甚一、鈴木一雄、その他の諸先生方に、私どもは徹底的に教えた。索引をつくるということは、私自身にとっても思わざることであつたが、本文をたんねんに読むということは、これはもう習性のようになつてしまつてゐる。その点で納得できなければなかなか前へ進めないという欠点があるが、「四条宮下野集」についていうならば、とにかくこれで一応の区切りをしたい、という気持ちがある。これをどう発展させるかは、すべて今後の問題である。そういうわけで、本文編では、私は、現在持っている力のすべてを出し尽くした。索引編でも、全力をあげて正確さを期した。しかし、なおかつ、初歩的なミスや、力及ばざるための誤まりがあるであろうことを怖れるのである。お気づきの点はどしどしお教え願ひたいと思つてゐる。少しづつでも改めていきたいと思ふからである。

都留文科大学中世文学研究会でも、まだ今後の計画はないが、意義ある合宿を、という精神だけはこれからも

持ちつづげていきたいと思っている。第一回の試みで最もへこたれてしまったのは実は私だけれども、たくさん  
の手でやる共同作業ということになると、やはり索引のようなものしかないのかなと、また思いかえしてみたり  
しているのである。今回の合宿に参加した諸君は次のとおりだが、今後暖かな目で見守り願いたいと思っ  
ている。

小熊 幸・石原克巳・福崎春雄・中島昭裕・泉 好子・杉本美知恵・秋山輝行・幸崎美津男・宝田良一・中  
野正昭・小林あき子・高橋則子・辻沢日出子・栗田純一・佐藤律子・東海林恵子・板東美佐子・深沢典子・  
前田芳美

なお、最後になってしまったが、いろいろお世話になった橋本不美男氏にはもちろんのこと、影印版の刊行を  
許可くださった宮内庁書陵部、面倒な出版をお引き受けくださった笠間書院の池田猛雄氏に、厚くお礼申しあげ  
る次第である。

昭和四十五年十一月

久保木 哲夫